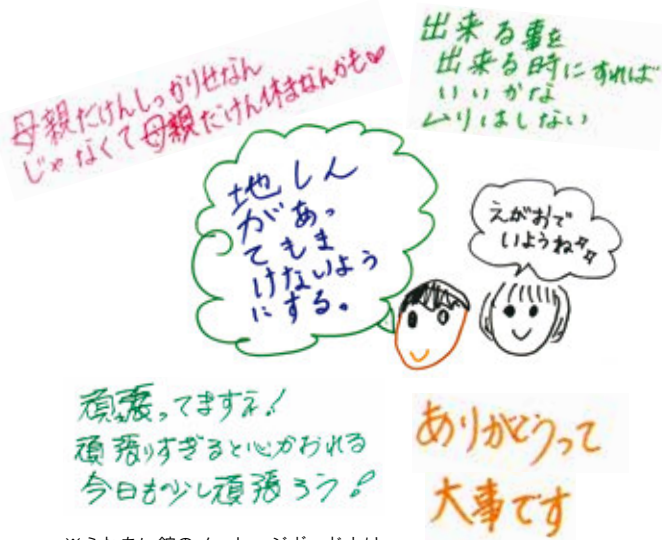
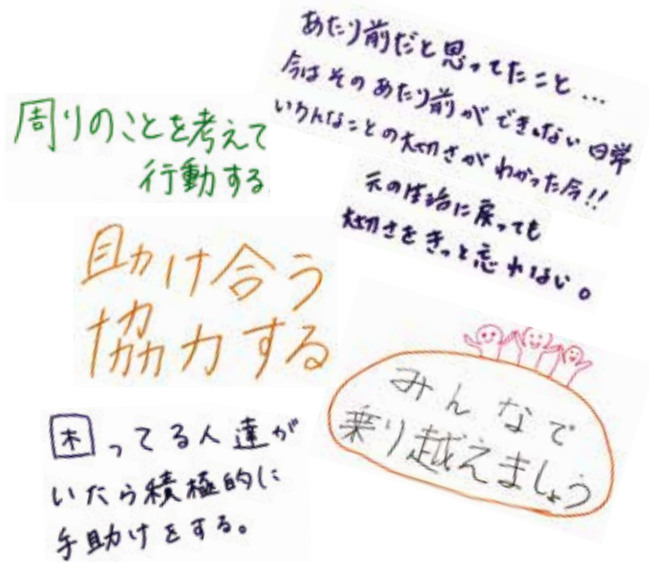




※ふれあい館のメッセージボードより

その一方で、震災以降、さまざまな支援が私たちを支えてくれた。全国の自衛隊や医療チーム、地元消防団や民間事業者、支援物資を送ってくれた数々の団体・個人。そしてもう一つ。変わり果てたまちの姿に心を痛め、「何かできることはないか」と動き出したボランティアの存在があった。自らも被災しながら、一人一人が自分ができることを考え、まちの復興に向けて一歩を踏み出した。

いま、私にできること



熊本地震から1カ月以上が経った。日常が戻ったようにも見えが、まだ復旧のめどが立たない家屋や施設も多い。家屋の倒壊や余震への恐れから、今も避難所生活を続ける人もいる。市内のり災証明書交付申請は、5月26日時点で4、337件にのぼった。そのうち、被害認定調査で確認できただけで全壊が20件、大規模半壊が32件、半壊が262件となったが、今後の調査でさらに増える予想される。



子どもたちがサッカーを楽しめる環境を取り戻したい

地震による休校のあいだ、「地元の復旧のため、自分たちにできることを」と集まった西合志南中出身の高校生たち。志村直樹さん（みずき台）がツイッターで友人らに呼び掛け、保護者・学校・市の承諾を得て活動を始めた。がれきの仮置き場となったみずき台グラウンドで、車の誘導やがれきの搬入・分類などを毎日手伝った。

「ここは、普段は子どもたちがサッカーを楽しむ場所。早く元の環境に戻ってほしい」という思いも込められていた。



仲間と家具の搬入を手伝う志村さん（左）



コミュニティセンターで地域住民が支え合い

すずかけ台自治会が、すずかけ台みどり公園と公園内のコミュニティセンターを避難所として自主的に開放。松崎和寛区長と役員の門垣紀博さん、園田幸功さんらは、毎晩、夕方から増える避難車の交通整理を行なった。多い日で約100人が避難、公園内の車は300台（車中泊含む）を超え、不安で自宅にいられない住民などが身を寄せた。また、夜に「ただいま」と戻ってくる人もおり、住民が何気ない会話を交わす交流の場にもなった。



松崎区長の姿にホッとした表情の避難者



新鮮野菜に温かい炊き出し 元気市で笑顔を発信

レストラン・すみっこの台所の皆さんを中心に、元気の森公園で毎月開催している元気市。本震から約1週間後、「みんなで元気を出そう」と開催され、地元農家から提供された合志産の新鮮野菜や草花の販売、温かいすいとんの炊き出しなどが行なわれた。

元気市を訪れた人は、地震の影響で品薄になった野菜を買い求めるだけでなく、ご近所さんや農家の皆さんと笑顔で会話を弾ませた。



買い物とおしゃべり。みんな自然と笑顔になった



地域みんなで元気になろう ぽっかばかフェスタ

地域づくり団体・ぽっかばか杉並台が開催したぽっかばかフェスタ。「被災してもふさぎ込んでばかりはいられない」「みんなに元気を取り戻してほしい」と、以前から予定していた行事を復興イベントに替えて実施され



生バンドの軽妙なトークで会場は笑いに包まれた

た。カレーや焼き鳥、かき氷などを販売し、子どもから高齢者まで幅広い年代の住民が参加。生バンドが登場すると、みんなで懐かしの歌を合唱し、和やかなひとときを過ごした。



避難所の子どもたちに笑顔を 博多からたこ焼きの炊き出し

博多区でたこ焼き店を営む中川雄介さんらは、須屋市民センターと泉ヶ丘市民センターでたこ焼きの炊き出しを実施。地震のニュースを見てすぐに材料を手配し、交通渋滞をくぐり抜けて3人で熊本に駆け付けた。

「避難所の子どもたちに笑顔になってほしい」中川さんらの願いどおり、あつあつのたこ焼きを笑顔ではおぼる子どもたち。お母さん・おばあちゃん世代もイケメンの登場に「目の保養」と表情を和ませた。



温かいたこ焼きに大満足の子どもたち



商業再建の足掛かりに 御代志のヤミ市で復興支援

御代志駅近くの三角地で行なわれた復興ヤミ市。須屋の居酒屋阿呆鳥の店主・福田和憲さんがフェイスブックなどで呼びかけて開催した。市内外から飲食店などの約20事業者が出店し、から揚げ、焼き鳥、かき氷、焼酎、雑貨などを販売。

建物の被災で立ち退きを余儀なくされ、空きテナントにも入れず厳しい状況の店も少なくない。まちの活性化に大きく関わる飲食店や商店。事業者の収入確保と商業復興も今後の課題の一つ。



青空の下で多くの家族連れがイベントを楽しんだ

災害

ボランティアセンター

発災から約1週間が経った4月22日、市社会福祉協議会は災害ボランティアセンターを発足させた。立ち上げの数日から、支援を必要とする人のニーズ把握や準備を行ない、ボランティアを募った。

5月14日までの活動で、市内外の個人や企業からの応援など、延べ973人のボランティアが参加した。自分たちだけでは片付けが困難な世帯を訪問し、がれき撤去や清掃など計220件を支援。オレンジのビブスを着た8〜76歳のボランティアが市内を駆け回った。



「見る人の心が少しでも和めば」と今秋俵治さん(群)と中村健さん(ユトリック団地)がふれあい館に設置したこいのぼり。これも一つのボランティアの形。



避難所を片付ける女子高校生たち。渡邊真帆さん(上須屋・写真⑧右)は自身の避難先・ふれあい館から友人らに呼び掛けて参加。避難所での幼児の見守りや清掃、復興メッセージボードの作製を行ない「自分にもできることがあるんだな」と感じた。

割れた食器やがれきを片付け自分のトラックで搬出した浦野聡さん(若原・写真⑥右)。吉良健志さん(須屋・写真左)は自衛官だったころの経験を生かして活動。(写真中央右から)中西恵莉さん(須屋)と高田美由紀さん(みずき台)も地元の復興に役立ちたいと参加した。



歯科衛生士の曾田玲子さん(上須屋・写真⑨左)と渡邊仁美さん(熊本市北区・写真⑩右)。子どもや高齢者を中心に、避難所生活でおそろそそになりがちな口腔ケアの大切さを伝えた。

日常の風景を取り戻したい



同じく大変な思いをした市内の人たちが協力胸が熱くなりました

さかぐち もとこ 坂口 幹子さん(大池)

家の片付けは自分ですでに思っていたが、一人暮らしで男手もなく、割れた大量の瓦には本当に困り果てていました。遠く県外にいる息子夫婦がボランティアセンターに連絡してくれました。瓦やがれきの撤去、倒れた家具や物置きを立て直し、テレビの配線のし直しなど、本当に助かりました。ボランティアの皆さんが私と同じく被災したはずの合志市民ということも、ありがたくて胸が熱くなりました。

また、近所で困っていた人が、この活動を見てボランティアセンターを知り、利用にもつながりました。



大型家具の運びだしなどがあつという間本当に感謝しています

きなぐ けんいち 木永 健一さん(上庄)

足が不自由で、特に自宅2階の片付けに手間取っていました。地元の民生委員さんを通じて2日間で計12人のボランティアの方が駆け付けてくれました。熊本高専の学生など若い人も多く、たんすやステレオなどの大型家具、崩れた大量のブロック塀をあつという間に運び出してくれました。

はがれた壁・割れたガラス・倒れた家具で足を踏み入れることさえできなかった部屋。夫婦二人では何日かかるか分かりませんでしたが、皆さんのおかげで片付けられました。微力ながら、今度は私も何かできることをしていきたいです。



ボランティアの皆さんのおかげで多くの困り事を支援することができました。しかしその一方で、困っている人のニーズの掘り起こしも課題です。ボランティアセンターについてはチラシやホームページ、民生委員の皆さんなどを通じてお知らせしましたが、情報に気づけない人もいます。また、知っていても「人に迷惑はかけられない」「自分でやらねば」と頑張りすぎてしまう人もいます。

周りが気づいて情報提供し、ボランティアの利用をすすめることが必要な場合もあります。いざというとき、普段からの、ご近所同士の結びつきが「お隣さん大丈夫かな」という声掛けにつながります。家族が近くにいない人も、周りに知人が増えればホッとできる場面が増え、安心につながります。



市社会福祉協議会
なるせ ゆうじ
成瀬 裕二事務局長

生活復興支援
ボランティアセンター
須屋2251-1(ふれあい館内)
☎242-7007

ボランティアを利用した人からは、「誰かと話すことで気持ち明るくなった」「二人じゃ何もする気にならなかったけど、ボランティアの人が来てくれたおかげで片付ける気力ができた」という声も多くなりました。

借りて、引き続き住民の皆さんを支援します。

できることは自分で。でも、一人では難しいとき、辛くて気持ちがふさがってしまったときは、ぜひ声を上げてほしい。余裕ができた人は、周りに困っている人がいたら手を差し伸べたり、当センターに情報提供したりしてほしいですね。

今、あなたにできることは何ですか。

今回の特集で紹介した人・団体の活動はほんの一部です。このほかに、市内外で支援活動に携わった人・団体が数多くあります。皆さんの温かいご支援とご協力、本当にありがとうございます。



大きな避難所の清掃に、小・中・高校生を含む約40人が参加。市ふるさと大使・谷山佳菜子さん(写真①左)も大阪から駆け付け、「少しでも力になりたい」と清掃やがれき撤去に加わった。



誰かの
力になりたい



職業を活かして避難所で整体を施した吉井治さん(新開)。「避難所生活のストレスや緊張は想像を絶する。心と体を少しでもほぐしたい」と自宅の片付けも後回しに、仕事後毎日駆け付けた。



みんなに
笑顔に
なってほしい

避難所で足つばマッサージを行なった川上昌宏さん(熊本市北区)。「4年前の九州北部豪雨で多くの人に助けられた。復興にはマンパワーがいる。今度は自分にできることをしたい」と参加した。

左から齊藤咲良さん(御代志)と渡邊笑奈さん(みずき台)。齋藤さんはツイッターでボランティア募集を知り、高校の寮から戻って友人らとボランティアに参加。避難所での何気ない会話や笑顔での交流は、ストレスで疲れた避難者の心を和ませた。



災害時と平常時では全てが違い、私たちが経験したことのないような出来事が頻繁に起こる。どこでどのような被害が発生し、誰がどのようなに困っているか。想像し、情報を集め、今後を予測して動くことが重要になる。

「誰か力になってほしい」
「誰かの力になりたい」

二つのニーズをつないだ災害ボランティアセンター。そしてセンターに協力したボランティア。二者が果たした役割は大きい。これに加えて地域の結びつきが強くなれば、より小さな範囲でニーズを拾い、助け合えるのではないだろうか。